

占い姫

北の大地は白い世界です。一年中ブリザードが吹き荒れ、決して溶けることのない雪と氷が見渡す限り広がっています。真夏にさえ氷点下が続く、厳寒の世界なのです。

けれども、その世界にも人は住んでいました。うさぎのような耳をして、体を毛におおわれているトジー族です。彼らは北の大地に適應して、長い年月の間に体を変化させてきたのです。

彼らは氷を削った家に住み、村や町を作って助け合っていました。その中でも一番大きな町がダイトです。千人を超すさまざまな職種の人々が、賑やかに暮らしています。

「今日も大獵だったねえ」

ダイトに向かって雪原を走るそのの中で、女が言いました。長い耳をしたトジー族で、分厚い毛皮の服を着込んでいます。フードから突き出た耳とフードの奥の前髪は、輝くような銀色です。灰色の瞳がそのりの中の獲物を眺めています。銀ギツネ、キタウサギ、雪オオカミ……何頭もの死んだ獣が積み込まれています。

話しかけられた男が、御者席から振り返って、にやっと笑いました。こちらも分厚い灰色の毛皮を着込んでいますが、長い耳はありません。フードの奥には茶色がかかった赤い髪とひげが見えます。背は高くなく、とてもがっしりした体格をしているのが、毛皮の上からでもわかります。この北の大地には住んでいるはずのない、ドワーフの体つきです……。

「おまえの占いのおかげだけ、レンラ」

と男は女に言いました。

「大したもんだよな。おまえが水晶玉で占ったことは、なんでも百発百中だ。おかげで俺はいつ狩りに出ても外れ知らずだ。上物ばかり仕留められる」

すると、レンラと呼ばれた女が笑いました。鈴を転がすような声が響きます。

「あたしは獲物が現れる場所を教えてあげられるだけさ。そいつを仕留められるかどうかは、あんた次第。あんたの獵師の腕がいいんだよ、グランツ」

ふふん、とドワーフの男も笑いました。得意そうな顔です。その背中には短い弓と矢を入れた矢筒がありました。ドワーフは普通地下から貴金属を掘り出し、それを加工して生活するのですが、彼は非常に珍しいことに、獵師を生業にしているのです。

ダイトの市場で獲物を金に換えた後、彼らはまたそりを走らせました。そりを引く灰色のトナカイが、氷の路面に蹄の音を響かせます。通りもそこに面した建物も、すべて氷を削り出して作られています。白、白、白……白一色の世界です。

男はそりの手綱を握りながら、しばらくその景色を黙って眺めていましたが、町を抜けて再び雪原に出ると、ふいに口を開きました。

「俺は山へ帰ることにした」

トジー族の女は驚きましたが、すぐに小さく笑って、うなずきました。

「きつと、そう言い出すだろうと思ってたよ」

「止めないのか？」

男が意外そうな顔になって聞き返します。

「止めたら残ってくれるのかい？ あんたはいつか、この北の大地か

ら去って行く。それはあたしの水晶玉にもちゃんと映っていたんだよ」
妙に明るすぎる声でした。作り笑いの声です。

レンラ、と男は言うつと、走るそりから振り返り、いきなり女のフードを脱がせました。そりに吹きつける冷たい風が、女の髪をあおつて吹き流します。銀の髪に銀の長い耳、小作りの顔は意外なほどかわいらしい表情をしています。

その顔を見つめながら、男が言いました。

「俺と一緒に北の峰へ行こう、レンラ。ここは一年中、白一色の冷たい冬だが、北の峰には四季がある。春の燃える若草色、初夏のけむる緑、真夏の深い深い緑、秋の紅葉、冬の白と黒の木立……花が咲く、蝶も飛ぶ、鳥もさえずる……北の峰は美しいところだぞ」

その色とりどりの光景が見えているように、男は遠いまなざしになっていました。

「この北の大地で来る日も来る日も雪と氷だけを見ていて、はつきりわかった。俺は、やっぱり自分の山が好きなんだ。何も無い、つまらない場所だと思ってきたが、寝ても覚めても、思い出すのはあの山なんだ。洞窟のドワーフどもも、了見の狭い下らない奴らだとばかり思ってきたが、こうしてみるとたまらなく懐かしくなる。俺はやっぱりドワーフだ。だから、北の峰に帰る。だが おまえとは離れたくないんだ、レンラ」

レンラは灰色の瞳を見張りました。男の顔は真剣です。褐色の瞳が、じつと彼女を見つめています。

けれども、やがてレンラは目を細めて微笑すると、そのまま顔をそらしました。

「あなたが連れて行きたいと思っっているのはあたし？ それとも、あたしの透視力？ あたしが一緒にいれば、絶対に食いつぶされることはないもんねえ」

とたんに、男は顔を歪めて女の腕をつかみました。怪力にレンラが悲鳴を上げると、男はどなりました。

「見損なうな！ 惚れた女を連れて帰りたいと思うのが、そんなにかしいか！？ 俺と一緒に来い、レンラ！ おまえに世界を見せてやる！」

女は思わず泣き出しそうになりました。泣きそうな顔のまま、笑って見せます。

「嬉しいね、グランツ。あなたにそんなふうに言われるなんてさ。あなたはドワーフだし、あたしはトジー族。そんなこと、絶対に言ってもらえないだろうと思っっていたのにね」

「それじゃ」
男が顔を輝かせました。そりはいつの間にか雪原の真ん中で停まっています。

すると、レンラは首を横に振りしました。

「行けないよ、グランツ……。あなたには雪と氷しかないつまらない世界に見えるかもしれないけど、ここはあたしにとっては世界中のどこより美しい故郷なんだよ。あなたが北の峰を愛しているように、あたしはこの北の大地を愛してる。そして、あたしはトジー族だ。この寒い場所こそ、あたしの生きていく場所なのさ」

男は思わず絶句しました。女はほほえみを浮かべたまま続けます。

「あたしは見てのとおり、ほんとに小さい。力もないし、働くことさえできないよ。でもね、あたしには透視力がある。占いならば誰にも負けない自信があるのさ。人々はあたしを占い姫と呼ぶ。でも、年を取って、姫と呼ばれる代わりにおばばと呼ばれる歳になっても、あたしはずっと北の大地の占い師として生きていきたいんだよ。あんたが、死ぬまで獵師として生きていたいと思っようじゃね」

男は何も言えずに、ただただレンラを見つめました。ドワーフの彼よりも小柄な彼女が、何故だかとても大きく見えます。

レンラが手を差し伸べてきました。

「元気で行きよ、グランツ。あんたの山を大切にね。あんたの上に、北の大地の女神の守りがありますように」

男は笑いました。胸の内の気持ちも言いたいことばもなにもかも、笑顔の奥に押し込めて、ただ女へこう言いました。

「俺の山には北の大地の女神の守りは届かないぜ。祈るなら、あの空にしてくれ。空ならどこまでも続いているから」

レンラはまたほえみしました。

「それじゃ、空の精霊があんたとあんたの山を祝福してくれるように……。ねえ、グランツ、あたしは、さようならは言わないよ。いつかどこかで、思いがけない形でまた会えるかもしれないからね」

「それは予言か？」

と希望を持つように男が聞き返しました。レンラは笑い返しました。「違うさ。でもね、人生なんて、いつだってそんなもんじゃないか。そうだろう？」

謎めいた女のことばに、男はいまいちな表情でほえみ返しました。

雪原を風が吹き渡り、薄い地吹雪の中に彼らの姿を隠していきました。

「あれから四十年かい」

氷の家の壁にかかった小さな肖像画を見ながら、占いおばはつぶやきました。

丸い部屋の真ん中では火皿が燃え、天井からつり下げられたランプ

が部屋全体を照らしています。

おばばが見ているのは赤茶色の髪とひげの青年の絵でした。がっしりとしたドワーフの体型をしています。

「ほんとにねえ、まさかこんな形であんたと再会することになるとは思わなかったよ、グランツ。あんたの孫はあんたに瓜二つじゃないのさ」

金の石の勇者と一緒に北の大地に現れたゼンは、見た目は祖父にあまり似ていませんでした。けれども、おばばにはそれがあの男の孫なのだと一目でわかりました。少年の魂の形は、驚くほど祖父のグランツにそっくりだったのです。

おばばは肖像画の男に話しかけ続けます。

「あんたはあれから幸せだったんだね……。あの子を見てわかったよ。良かったじゃないのさ」

遠いあの日の思い出と、もう手も届かない彼方の後悔が、今さらながら老いた胸を騒がせます。年甲斐もないことと、おばばは皮肉な笑いを浮かべました。

しわだらけになってしまった小さな手、しわが深く刻まれた顔。銀の髪と耳は雪よりも白くなりました。もう誰も彼女が「占い姫」などと呼ばれていたことを覚えてはいません。

すると、肖像画の男が尋ねかけてきたような気がしました。「おまえはどうなんだ、レンラ？ おまえは幸せだったのか？」

おばばは肖像画をまた見上げました。「あたしかい？ あたしは」

その時、さっと入口のトンネルから冷たい風が吹き込んで、部屋の仕切りのカーテンから大柄な男が顔をのぞかせました。ウー、と声をかけてきます。

「客？ ああ、入っておもらい」

とおばばは答えました。著名な占い師のおばばを訪ねて、客が来たのです。大男のウイッスルはうなずいて、カーテンから頭を引っ込めました。

おばばは肖像画の男をまた見上げると、大きくにっこりと笑いかけました。

「あたしも、もちろん幸せだったさ、グランツ。ずっと、ずうっと、幸せでいたよ」

ウイッスルの案内で客が家に入ってきました。不安そうな様子のトジー族の若者です。悩んで思い詰めた顔をしています。

占いおばばは客の前に座ると、ほほほ、と声を上げて笑いました。「なんて顔してるんだろうね。さあ、何を知りたいのかお話しよ。あたしはダイトの占いおばばだ。あたしの占いは、よく当たるんだからね」

果てしなく白く広がる北の大地。

永遠に変わることのない景色の中に、今日もまた雪が降り続いていました。

(2007年2月3日)